

## JICA 中国事務所ニュース

2010年4月号

### 【トピックス】

- ◎ 震源地にJICA 医療同窓会の先生達が来てくれました…………… 2
- ◎ 「日中技術協力の背後」がここ中国で出版！…………… 3

### 【ニュース】

- ◎ 四川省震災後森林復旧を開始…………… 4
- ◎ 砂漠を緑の大地に！…………… 4
- ◎ 朝日緑源スタディーツアー…………… 5
- ◎ 国際私法セミナーを開催…………… 6
- ◎ 日本の納税者サービスを紹介しました…………… 7
- ◎ 汚水処理場グレードアッププロジェクト始動…………… 7
- ◎ モデルサイトの小学校にて水資源の出前講座を実施…………… 8
- ◎ 日本の公害病被害補償制度に学ぶ…………… 9
- 【寄稿コーナー】…………… 10
- 【赴任者紹介コーナー】…………… 11



地震被災地の患者さんに囲まれた医療分野帰国研修員

皆様からのご感想やコメントをお待ちしております。

メールアドレス：[shenxiaojing.cn@jica.go.jp](mailto:shenxiaojing.cn@jica.go.jp)

- <http://www.jica.go.jp/china/office/library/news/index.html> (中国事務所ニュース)
- <http://j.people.com.cn/99005/index.html> (ボランティア活動)
- <http://searchina.ne.jp/jica> (サーチナJICAページ)

## トピックス

### 震源地に JICA 医療同窓会の先生たちが来てくれました



5.12大地震の震源地になった映秀鎮

3月12日の朝、四川大地震震源地の汶川県。町には人通りはまだ少ないですが、県人民病院の診療ビルの前には、診療を待つ住民の長い列が出来ていました。JICA 医療分野帰国研修員同窓会（以下「同窓会」と略称）の専門家チームがこの町にやってくるのです。この日から二日間、威州鎮と映秀鎮で無料問診活動を始めようとしています。これは昨年の2月に北川県と什邡市において実施された活動に引き続き、被災地で行われる第2回目の公益活動です。

長い列の先頭にいた蔡世香さん（61歳、女性、羌族）は「医療チームが無料問診で来られることを聞いて本当に嬉しかったです。夜明け前に克枯郷の家を出て、数時間の山道を歩いてようやくここにたどり着きました。北京から来た先生に診察してもらいたくてね」と血液科の馬一盖主任医師の前に坐ってさっそく問診をはじめました。汶川県は羌族とチベット族が多く住む町で、山奥の交通が不便なところに生活している住民もたくさんいます。家族が押す車いすに乗って来た威州鎮の李盛密さん（69歳、男性）は昨年脳梗塞になり、現在リハビリ中ですが、持ってきたレントゲン写真やカルテなどを神経内科の金森副主任

医師に見せながら、親身になって話をしてくれる先生の言葉に何度もうなずいていました。「成都の病院に行くたびに、一回だけで旅費と薬代で千元以上がかかるので、行きたくても何回も行くことが出来ません。今日は、病院が、大病院の先生が自分の家の前に来てくれて、本当に嬉しいかぎりだ」と感想を語ってくれました。

医療の立ち遅れだけでなく、医療費は社会保障システムが十分整備されていない中国の農村部の人々にとって、大きな負担となっているのが現実です。

二日間で無料問診を受けた患者は約300名に登りました。活動を終えてバスに乗った医師が、追いかけてきた患者の強い要望に応じて再び車を降りて診察を行う場面も数回ありました。西部地域の厳しい医療事情の一面が見えてきます。今回医療チームのリーダーを務める中日友好病院の姚樹坤副院長（消化内科主任医師）からは「非常に忙しかったけれど、大きな収穫も得られました。地方医療の最前線に来て、患者、病例などを通して地方医療現場の厳しい実情を肌で知ることが出来ました。これは我々にとって今後の仕事の参考になるとともに、これからの同窓会公益活動をより効果的に展開していくことにも大変有益な経験になりました」との発言がありました。

今回の無料問診には中日友好病院の医師のみではなく、四川人民病院、華西病院、四川省広元市第一人民病院、陝西省西安市中医病院の専門家も参加しています。特に、前回の経験を踏まえ、被災地住民のニーズに応じて心理諮詢師（心理カウンセラー）もチームに付け加えました。また、四川省と湖北

省で活動中の青年海外協力隊員 2 名(看護師、うち 1 名は日本の DMAT(災害医療援助隊)隊員)、JICA 中国事務所の関係者も、医療チームと一緒に被災地に赴きました。

「被災地の人々の生活復興と自信回復に少しでもお役に立てれば。住民の皆さんがより安心して健康的に暮らせるよう、我々は引き続き被災地の皆さんを見守りながら、息の長い支援が出来るよう頑張っ取り組んで行きたい」と尹勇鉄同窓会副理事長(中日友好

病院国際交流合作処長)が言っています。

日本の経験と技術を学び、日中関係の理解者と応援者で構成された医療同窓会は、今やネットワークが全国に広がり、様々な貧困地域の社会弱者に愛の手を差し伸べています。このような同窓会活動を、JICA 中国事務所も引き続き応援していきます。

(所員 周妍)

## \* お知らせ

### 『日中技術協力の背後』がここ中国で出版！！

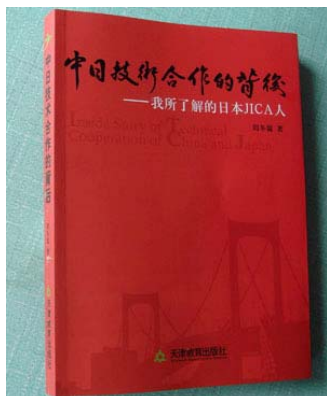
#### ～中国人ジャーナリストが描いた JICA 専門家・ボランティア群像～

今般、在北京の中国人ジャーナリストである周冬霖氏が、天津教育出版社から、「中日技術合作的背後—我所了解的日本 JICA 人」を上梓されました。

(参考: 人民網)

<http://japan.people.com.cn/35468/6929199.html>

同氏はこれまでも 2005 年に「日本対華無償援助実録」を出版されるなど、一貫して日本の対中 ODA に関心を寄せられてきましたが、昨年の対中 ODA30 周年を契機に、ぜひとも日本の専門家・ボランティアの活躍を回顧し、一冊の本にまとめて中国国民に広く知ってもらいたいとの強い思いから、本書の執筆に至った由です。



本書には、100 名近い JICA 専門家、青年海外協力隊員などのボランティアが登場します。その内容の多くは、周冬霖氏本人

が直接中国側カウンターパート機関や場合によっては専門家・ボランティアご本人へのインタビューを行って執筆されたものです。こうした中国人ジャーナリストの眼から見た、中国語で書かれた日中技術協力の現場の記録—ヒューマンストーリー—は、これまで例がないものと言えるでしょう。ご関心のある方は、まずは本書を手にとってみてください。

**購入希望の方は以下の著者のアドレスからも入手可能です。cnjpsakura@163.com**

【参考: 表紙裏の本書紹介文(仮訳)】

日本が 1979 年に対中政府開発援助 (ODA) を開始してから今日まで、既に 30 年の月日が流れた。この間、中国の改革開放と近代化を支援するため、日本国際協力機構 (JICA) は、対中 ODA プロジェクトを実施する中で、相次いで 7,000 名を越える関係者を派遣してきた。彼らは、それぞれの分野において、中国の人民とともに生活し、ともに仕事をし、ともに考え、深い友情を結んできた。

本書は、多くの客観的な資料を基礎として、中国で傑出した貢献をし、真心をこめた無私の精神で中日両国の友好の橋を架けた一群の日本人を、生き生きと詳細に描いた記録である。

(次長 岡田実)



## ニュース

### 四川大地震後の森林復旧を開始！

#### ～四川省震災後森林植生復旧計画プロジェクト キックオフ・セミナー～



セミナーにはマスコミも多く参加し、  
中国全土に報道されました



地震で崩れた四川の山林放置しておくと、  
土砂災害などの二次災害の恐れがあります

四川大地震で被害を受けた森林を復旧する「四川省震災後森林植生復旧計画プロジェクト」が2010年2月から開始され、3月19日に四川省の成都で約100名が参加してキックオフ・セミナーが開催されました。セミナーには四川省林業庁、国家林業局、日本大使館、JICA事務所、日本人専門家などに加え、震災被害を受けた陝西省や甘肅省からも林業関係者が参加しました。

中国側関係者からは20年以上にわたる日本の援助に対して感謝の意が述べられるとともに、世界トップレベルの日本の治山技術に対する熱い期待が寄せられました。日本側からは震災後の復旧支援に日本は重点的に取り組む決意が発表されました。

また、現場で震災後の森林復旧に携わる林業担当者からは技術面の課題だけでなく、現行の制度的な課題（縦割り行政や復旧工事に関する単価・入札方法、土地の利用権を持つ農民との関係等）について多様な意見が出され、プロジェクトで取り組むべき課題の全貌が見えてきました。

震災が山林に残した爪跡は大きく、1つのプロジェクトだけで全てを回復することはできません。しかし、プロジェクトを通じて、日中協力の下、現地に適した復旧方法が開発され、普及されれば、いつの日か四川の山々に美しい緑が戻ることでしょう。セミナーはそんな未来に向けた第一歩でした。

（所員 足立佳菜子）

### 砂漠を緑の大地に！

#### ～内モンゴルアラシャン盟における草の根植樹祭～

日本にまで到達して被害をもたらす黄砂。今年は日本中で黄砂が観測され、ニュースになりました。中国でも北京の街全体が黄土色にくすみ砂が降り積もるなど、各地で黄砂が話題になりました。この黄砂の主な発生源の一つが内モンゴルのアラシャン盟。ゴビ砂漠に位置するアラシャン盟では年間降水量

が200mmにも満たず、大きな砂嵐が年平均90日もあります。

このような厳しい環境の中で、日本のNGO「世界の砂漠を緑で包む会」が砂漠化防止の草の根事業を実施しています。3月27日には日中のボランティア約60人が参加して植樹祭が行われ、約3,000本の木が砂漠に植

えられました。苗木代など50元を自己負担しなければならぬにも関わらず、小学生、大学生、親子、老夫婦など老若男女が参集、食事の時間も惜しんで木を植えました。植林



植樹祭に集まったボランティア  
日本からも5名のボランティア  
(オレンジのジャンパー)が駆け付けた。

過放牧や過度な開発などで自然を壊すのも人間ですが、砂漠に木を植え、砂漠を緑に戻していくのも人間です。アラシャンでは、かつては1本の木も植えたことがなく、植林の必要性を感じたこともなかった遊牧民が、草の根事業を通じて植林の重要さに気づき、自

後の交流会では、植林効果や限りある地下水の持続可能な利用方法などについて真剣な意見が出され、地域の人々の環境意識の高まりを感じました。



植林するボランティア  
青と白のジャージは地元の小学生

ら木を植え、環境に負荷をかけない方法での生計向上を考えるようになってきています。人々が自らの環境を守り、改善していくように、そんな願いをこめて「包む会」は活動を続けています。

(所員 足立佳菜子)

### 朝日緑源スタディーツアー ～持続農業プロジェクト 環境に優しい農業技術スタディーツアー実施～



1500頭ほどを抱える乳牛は、牛の蹄に優しい土の上で育てられています。厳しい品質管理をされた牛乳は、北京などでも一部スーパーで売られています。

持続農業プロジェクトは、3月23、24日、山東省で循環型農業を実践している山東朝日緑源農業高新技术有限公司と山東朝日緑源乳業有限公司(以下、「朝日緑源」と略)



牛糞などから作られた堆肥が、イチゴ作りに肥料として使用されています。農業と畜産が連携することによる、資源循環が朝日緑源の目指す農業です

を訪問するという、中国におけるより持続的かつ安全な食品を目指す循環農業について考えることを目的としたスタディーツアーを実施しました。参加者は研究機関、行政、企業

や農家の方々に、環境負荷軽減のための施肥管理等について学習するとともに、農場や牛乳出荷作業の見学もできました。

今回の活動は、現在山東省萊陽市で牛乳生産や各種野菜栽培を循環農業の理念の下に行っている、朝日緑源の多大なご支援を頂くことで実現しました。同社の循環農業に向けた取組みの見学と日本からの専門家による環境負荷軽減のための施肥管理や土壌管理に関するセミナー等を組み合わせ、中国における環境に配慮した持続的農業について、「農場」で考える機会を用意しました。このような企業との連携は今後も継続して行い、最近のODAの新しいキーワードの一つでもある「官民連携」の我々なりのあり方にし

たいと考えています。ちなみに、同社のスタッフには、青年海外協力隊 OB の方々が採用されており、農民の方々と共に仕事をされていました。

研究機関、行政、企業や農家が一堂に会し、持続可能な農業、循環農業に関して考える; 今後も生産現場に近い場所で、環境に優しい農業技術について理解を深める活動に取り組んでいきます。

#### \* 参加者の声(一部紹介)

研究員:「セミナーを通して農民の心の声・考え方に触れることができて良かった。」

農民:「循環型農業という新たな知識が増えて良かった。今後も勉強を続けたい。」

(長期専門家 今井淳一)

## 国際私法セミナーを開催

突然ですが、中国に住んでいる日本人が米国ニューヨーク州内に不動産を残して死亡した後に相続をめぐる紛争が起こった場合、中国、日本、ニューヨーク州のうち、どの法律を適用するべきでしょうか? 各国では、このような国際的な法人や人の民事紛争の際に適用されるべき法(準拠法)を決めるため、「国際私法」を制定しています。近年、企業や人々の国境を越えた活動が盛んになるにつれ、紛争のリスクも大きくなってきています。紛争を予防し、また発生した紛争の解決を促進するため、国際私法の役割はますます大きくなっていきます。改革・開放政策と経済発展の進捗により、国境を越えた民事紛争が増加している中国も国際私法を重視し、その改正を準備しています。

こうした背景から、3月22日から23日にかけて、JICAは全人代民法室と国際私法セミナーを全人代会議センターで共催しました。全人代民法室の国際私法改正準備への協力として、日本の国際私法の基本的な考え方を紹介するのが目的です。日本から国際私法分野の権威である櫻田嘉章(さくらたよ

しあき)先生と神前禎(かんだきただし)先生、法務省法務総合研究所国際協力部の赤根部長、横山教官、内田専門官にお越しいただき、また法整備支援分野 ODA タスクフォースメンバーである大使館の長田書記官、民訴法・仲裁法改善プロジェクトの住田長期専門家にもご協力頂きました。

セミナーでは、櫻田先生より日本の国際私法立法の歴史及び現代化の流れについて、神前先生より日本における現行の国際私法の概要及び条文について、説明いただきました。また、日中間の専門家及び立法担当者間で国際私法の構成、法律適用などをめぐって熱心な質疑応答が行われました。

中国側は、今回のセミナーを非常に有意義だと高く評価しました。日本と中国の企業・個人にとって、国境を越えた活動が益々活発になるなかで、それぞれの国の固有の法制度やその運用に関する知識を持つことが、トラブルの回避や解決のために不可欠になっています。JICAは今後も、国際私法分野での協力や民事訴訟法・仲裁法改善プロジェク



トなどを通じ、日中両国の法制度の相互理解  
促進や中国の法制度整備への支援を実施し

ていきます。  
(所員 宗雪)

### 日本の納税者サービスを紹介しました ～税務行政セミナーを開催～

近年、中国税務当局は納税者に対し「管理」から「サービス」への意識転換を図ろうとしています。その大きな動きとして、2008年に国家税務総局の中に納税者サービス部(中国語名:納税服務司)を設立し、サービスの改善・充実に力を入れています。

今回のアモイ市でのセミナーは、日本国税庁の講師2名が、中国の中央・地方の税務官約60名に対し、日本の納税者サービスの経験を紹介すると共に、中国の納税者サービスに係る諸課題を中国の税務官と一緒に議論し、アドバイスすることを目的に行われました。

講師は広報・租税教育、申告納税支援、税務相談・苦情処理、税理士制度等について、日本が持っているノウハウや経験を紹介しました。セミナー参加者からは大きな関心が寄

せられ、講師は講義中にとどまらず、休憩中や講義終了後も質問者に囲まれていました。その様子からは全国各地から参加した若手幹部の勉強意欲と熱意が感じられました。

2009年2月に桂林で第1回目の納税者サービスセミナーが開催されてから1年の間に、「納税者サービス3カ年計画」、「納税者の権利・義務にかかる通告」が公布され、地方の納税者サービス部署もほぼ設立されるなど、大きな進展が見られました。

しかし、広大な国土と多数の税務職員を抱える中国では、全国各地に行き届いた統一的な納税者サービスのシステムの確立等の課題が残っています。これまでの活動をベースに、次回の研修でまた有意義な議論ができるよう期待しています。

(所員 鮑迪娜)

### 汚水処理場グレードアッププロジェクト始動!



起動式・セミナーの様子

2月24日、JICAと中国・住宅都市・農村建設部は、北京市において「汚水処理場のグレードアップ改造と運営改善に関するプロジェクト」の起動式を開催し、正式にプロジェクト



北京市内の高碑店汚水処理場

が開始されました。中国では急速な経済発展とともに水環境保全、汚水処理のニーズが増しており、排出基準も厳しくなっています。そのため既

存の汚水処理施設においても、高度処理化の改造など基準を達成するための取り組みが求められています。今回の技術協力プロジェクトは、自治体や企業をはじめ日本の下水道事業に蓄積された高度処理分野における経験や技術を活かし、中国の都市部の大規模処理施設や農村部の小規模処理施設の高度処理化に必要な技術指針の作成を目指すものです。個別の活動では、北京市高碑店汚水処理場や雲南省昆明市内の汚水処理場など、これまで円借款による協力を

ってきた機関との連携も進めていく予定です。

起動式当日は技術セミナーも開催し、日本人専門家から琵琶湖における最先端の高度処理の取り組み事例や、窒素除去効率を高めるための日本の技術が紹介され、中国における今後の高度処理の進め方に関する意見交換が行われました。これから、専門家の派遣や日本での研修実施など、活動を本格的に進めていくことになっています。

(所員 坂元芳匡)

### モデルサイトの小学校で水資源の出前講座を実施 ～節水型社会構築モデルプロジェクト～

1月13日及び15日、「日本水フォーラム」の節水リーダーである橋本淳司専門家が、当プロジェクトサイトである鄭州市・濰博市の小学校において、出前講座(テーマ:水を大切にするためにできることを考えよう)を行いました。その目的は、当プロジェクトの内容の1つである、効果的な節水普及啓発を行える人材育成の一環として、節水担当の政府関係者や小学校の教員に、日本の節水教育のやり方を実際に見てもらおうことです。

橋本専門家は、世界各地の水資源の状況を説明しつつ、水資源の重要性を伝えていきました。小学生たちは、目の前に置かれた10ℓのバケツを見ながら、1日の生活の中で、如何に多くの水を使っているかということを考えたり、水の少ないアフリカにおける水運びの大変さを、実際に20ℓのペットボトルの入ったバッグをもって体験したりという、参加し、体験し、考えるという授業でした。聴講した小学生の人数は150名余で、積極的に手を挙げて、橋本専門家の質問に答える姿が印象的でした。

これまで、鄭州市や濰博市でも、節水の普及啓発活動が行われてきました。しかしながら、その方法は、ラジオやメディアをつかった政府から市民に対する公共広告という手段によるメッセージの発信であり、小学生や住



小学生達が水について真剣に考えました

民が、節水について自ら考えるというスタイルのものではありませんでした。

今回の橋本専門家の方法は、現地の政府関係者の目には新鮮に映ったようで、今後、モデルサイトから、節水リーダーを選出して、同じような内容の活動を展開したいという意見も出てきています。今後、当プロジェクトの活動が、中国の節水教育にとり、一助となるよう、取り組んでいきたいと思えます。

(長期専門家: 竹島睦、泉博隆)



## 日本の公害病被害補償制度に学ぶ ～中国から、最前線で奮闘する担当者が来日～



日本の公害対策の歴史を真剣に耳を傾ける研修員

急速な経済発展に伴い環境問題が深刻化している中国。

環境保護法で「環境汚染被害を引き起こした主体は、被害を受けた機関または個人に対して損失賠償する責任を負う」と定められているものの、実際にどのように被害を認定し、責任の範囲を確定し、賠償していくかという「実施細則」に当たる部分は、依然として空白のままです。現在、市民からの訴えに対しては、国や地方自治体が企業との間に入り調停を行っていますが、根拠となる詳細な法律や制度がないため、非常に時間がかかり、現場は混乱しています。

公害病患者救済に焦点を当て、その政策形成や制度構築に携わる関係者の能力を強化する目的で、「環境汚染健康損害賠償制度構築推進プロジェクト」が2009年10月より開始されました。今回は中央及び地方政府

の環境担当官ら10人が研修員として来日し、3月7日から約2週間かけて、東京、大阪、熊本の関係機関を精力的に視察して回りました。

東京で日本の公害対策の歴史、「公害健康被害の補償等に関する法律」(公健法)、公害紛争処理制度、企業の取り組みなどについて講義を受けた後、研修員たちは、かつて公害病を経験した大阪府と熊本県を訪れました。熊本県には3日間にわたって滞在しましたが、水俣病に関する取り組みをつぶさに視察した研修員の心に、大きく訴えかけるものがあつたようです。

「介護施設で患者さんから直接話をうかがったことが大変参考になりました。私の所属する河南省環境保護庁は、企業と市民の間立って調停する立場にありますが、いかに患者さんが苦しんでいるかを改めて知り、自分たちの役割を再認識しました」と、河南省から参加した原有峰さんは感慨深げに語りました。

2012年10月までの3年間を協力期間とするこのプロジェクトでは、今後2回の日本での研修に加え、日本の専門家を中国へ派遣して現地セミナーを開催することも予定しています。中国の公害病被害補償制度構築が一日も早く実現できるよう、JICAは引き続き支援を行っていきます。

(所員 那須毅寛)

## 寄稿コーナー

### 湖北省恩施市 湖北民族学院にて日本祭り開催！



浴衣のチャレンジ

まだ時おり肌寒さも感じる3月中旬。

3月13日、湖北省恩施市湖北民族学院で日本祭りが開催されました。

浴衣の試着コーナー、日本のおもちゃ紹介、生け花教室…

アニメ紹介、野球体験、そしてお寿司やカレー等、日本食の販売。

「いらっしやいませー！」という掛け声とともに、日本祭りはとても盛況でした。

お祭りを主催したのは日本語学科の学生達。この日は、本当に目がキラキラしていました。お揃いで着込んだ、色とりどりののはっぴが、笑顔にとってもマッチしています。彼らはこの日のために、お祭りの準備や日本についての勉強を重ねました。

浴衣の着付けでは、夜遅くに先生の家に集まり、帯の結び方を覚えました。お寿司を作る学生は、寿司飯の配合を何度も何度も試していました。

そして、お祭り当日。

学生達はまるで日本人のように堂々と楽しそうに、日本祭りを紹介しました。

生け花教室では、学生が真剣な様子でお花の差し方を指導します。日本のおもちゃ紹介コーナーでは、近所の子供たちと一緒にあって、伝統的なおもちゃで遊んであげていました。

恩施には日本人がとても少ないので、日本紹介にはみんな興味津津。

一日中、ひっきりなしに色んな人が訪れました。

そんな学生達の頑張りのおかげで、恩施の新聞に日本祭りが！

<http://www.enshi.cn/20100112/ca173671.htm>

私はアドバイザーとして、あくまで学生の自主性に任せました。

「大学生は大人だから、自分達の力で頑張ってみなさい。」と勇気づけて。

学生達が頑張っている姿を見て、とても晴れやかな気持ちでした。

最後に一緒に記念撮影をする事になり、嬉しい出来事が。

普段、中国では、記念撮影の時に先生が一番前の目立つところが指定されます。でも、男の子達が自分達の場所を指さしながら、こう言いました。

「先生は俺達と一緒に写ろうぜ！」

学生と本当に一体になった気がして、嬉しくて涙が出そうでした。

「先生、今日は一生忘れられない日になりました！」これは女の子から。

彼らが将来、社会に出ても、ふっと今日の日を思い出してくれたら。

そんな気持ちを抱かずにはいられない、素晴らしい日本祭りでした。

(矢部洋平 湖北民族学院 外国語学院  
日本語教師 青年海外協力隊員)

## 赴任者紹介コーナー

3月29日にシニア海外ボランティアの高橋知廣(ソフトウェア)さんと、森英昌(野球)さんが北京に到着しました。高橋さんは2年間、大連市の日中友好大連人材育成センターで

ソフトウェア開発の指導を、森さんは4ヶ月間、重慶市の南開中学校で野球の指導にあたります。今後のご活躍を期待しています。



左が森さん 右が高橋さん

■長期シニア海外ボランティア

高橋 知廣 ソフトウェア 遼寧省 日中友好大連人材育成センター

■短期シニア海外ボランティア

森 英昌 野球 重慶市 南開中学校